

日本計量生物学会ニューズレター第95号

2007年11月30日発行

～・～・～・～・～・目次～・～・～・～・～

- ① 巻頭言「バイオ統計学「こと」はじめ」
- ② 2007年統計関連学会連合大会報告
- ③ 2008年の年次大会に関するお知らせ
- ④ 日本計量生物学会 2007年第4回対面理事会議事録
- ⑤ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い
- ⑥ 第24回国際計量生物学会 開催のお知らせ
- ⑦ 2008年度統計関連学会連合大会のお知らせ
- ⑧ 2008年度日本臨床薬理学会海外研修員募集要項
- ⑨ 2008年度日本臨床薬理学会 CRC 海外研修員募集について
- ⑩ 編集後記

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

① 巻頭言 バイオ統計学「こと」はじめ

柳川 堯(久留米大学バイオ統計センター)

「大学院プログラム」の継続

2003年4月、久留米大学大学院医学研究科にバイオ統計学の修士課程、翌年博士課程、が設立された。バイオ統計学「こと」はじめである。文部科学省の平成15年度科学技術振興調整費新興分野人材養成プログラム募集に応募し、採択されて可能となった。このプログラムは、バイオインフォマティクスなど新興分野の人材養成を目的とし、毎年1億円の補助を5年間にわたって支給すること、採択された大学はこれを呼び水としその間に人材養成体制を整備・発展させ、プログラム終了後は大学のイニシアチブの下で人材養成を継続することが建前としてうたわれていた。「バイオ統計学大学院プログラムを毎年多額な費用を負担して継続する価値はあるの」という大学法人の厳しい問い、「久留米のような田舎大学に大学院プログラムを作っても人は集まらない、人材は育たない」という冷ややかな目線を克服して、久留米大学は、2000年4月以降もバイオ統計学大学院プログラムを継続し、一層充実発展させることを決定した。5年間の実績を高く評価していただいた。日本計量生物学会会員諸氏のこれまでのご支援を深く感謝するとともに、一層のご支援・ご鞭撻をお願いしたい。

バイオ統計学とは

「日米バイオ統計学会議」(1978, 1988, 1993), 「バイオ統計学からの展望」(日本統計学会誌, 30巻, 3号, 2000)などのように筆者は個人的にバイオ統計学という用語を使用してきた。渋谷政昭さんから、biostatisticsの訳だと思いがカタカナでbioをあらわし統計学と続けるのはキタナイ日本語であると批判を受けたことなどを懐かしく思い出す。私どもは、「こと始め」に当たって、改めてライフサイエンスが対象とする研究全般に関する数理学的研究をバイオ統計学と定義した。具体的にいえば、人の健康への貢献を目的として行われるヒト、動物、植物、微生物、DNAそれぞれに関する研究、およびそれぞれの間のインタラクション、さらにはこれらと、これらのものを取り巻く環境とのインタラクションの研究に関わる研究の計画、データの収集、モデル化、解析、計算をバイオ統計学のパラダイムの中で位置づけた。これらの分野は「生物統計学」、「医薬統計学」、「医療統計学」、「臨床統計学」などとよばれてきた。そのどれをとっても私どもにびったりこなかった。例えば「生物統計学」からは臨床試験に関わる統計が、「医薬統計学」、「臨床統計学」からは環境汚染物質の健康リスク評価などに係わる統計が抜け落ちているような気がした。

何より、21世紀に最も期待されている「疾患に関する遺伝子を探索し、個別最適医療(オーダーメイド医療)」に係わる統計が浮かび上がってこないように思われた。要は、広い視点に立つ人材養成カリキュラムの創意工夫が、「バイオ統計学」という新しいパラダイムを必要としたのである。

更なる発展に向けて

診療、研究にかかわる医師は、今日きわめて複雑・多様なデータに立ち向かい、「根拠をもつ医療」の確立に努力している。久留米大学バイオ統計センターは、人材養成を推進するとともに統計コンサルティングを重視しているが、持ち込まれるデータの複雑・多様性に改めて目を見張る。このようなデータの解析は医師のレベルをはるかに超え、専門教育を受けたバイオ統計家でないとは対応できない。「根拠をもつ」医療を確立するためには、バイオ統計学が不可欠である。なぜ、他大学医学部がバイオ統計センターをもつ努力をしないのか不思議である。少なくとも、複数の大学医学部・病院を地域としてまとめ、バイオ統計学の講義、人材養成、コンサルティングを提供する地域ごとのバイオ統計センターの設置が緊急に必要である。手元に「文科省、新規に50億円予算要求」(<http://www.zenshigaku-np.co.jp/news/2007/news2007092320770101.html>)のピラがある。戦略的な大学連携支援として、地域振興へ国公立大の壁を超えて、教育研究設備の共用推進、先進的プログラム開発、連合大学院の構想がうたわれている。各地にバイオ統計学人材養成拠点を作る絶好の機会のように思われる。手を上げませんか。ノウハウ、喜んで差し上げます。

②2007年統計関連学会連合大会報告

上坂浩之, 折笠秀樹, 岩崎 学, 南美穂子
(統計関連学会連合大会年会企画担当理事)

2007年の統計関連学会連合大会は9月6日から9日にわたって神戸大学で開催されました。6日にはチュートリアルセミナーと市民講演会が催されました。また、研究発表会では、学会ごとの企画や若手研究者を対象としたコンペティションも催されました。大会全般の報告は、統計関連学会連合のホームページ「<http://www.jfssa.jp/>」に掲載されております。この報告の案内は既にメーリングリストで会員の皆様にお知らせした通りです。この大会報告では計量生物学会に直接関連するチュートリアルセミナー「生存時間解析における競合危険モデル入門」について報告(再掲)いたします。

今年度はチュートリアルセミナーの開催に当たって、会員からテーマを募ることとなりました。今回3テーマを実施しましたが、この「生存時間解析における競合危険モデル入門」は会員の方より応募いただいたものです。広く会員から希望テーマを出していただくことにより、より会員に密着したチュートリアルセミナーを企画できるものと思います。例年と異なり、本年のセミナーは2時間30分のテーマ2つをまとめて1コース、5時間のテーマを1コースとする2コースを並行して実施しました。関東地方を台風が直撃するという状況にも関わらず、225名収容の教室のいずれもが満席に近い状況であった。多くの方のご聴講をいただいたことにお礼申し上げます。他の2テーマは以下の通りです。これらに関しては、上記の連合大会のホームページの報告をご参照ください。

「バイズ統計とベイジアンネットワーク」;オーガナイザー:繁

榊算男(東京大学総合文化研究科);講師:榊算男(東京大学総合文化研究科), 植野真臣(電気通信大学), 本村陽一(産業技術総合研究所)
「大規模データ解析の現状と問題点」;オーガナイザーならびに講師:樋口知之(統計数理研究所)

「生存時間解析における競合危険モデル入門」;オーガナイザー:上坂浩之(日本イーライリリー);講師:西川正子(国立保健医療科学院・技術評価部)

生存時間解析は,ある個体あるいは対象を経時的に観察し,注目している事象が発生するまでの時間を解析の対象とする.このとき注目している事象以外の原因,すなわち競合危険によるセンシングの発生が問題になる.医学・生物学データの解析ではしばしば競合危険因子間の独立性が仮定されるが,この仮定は多くの場合データから確認できない.また生存関数の推定では Kaplan-Meier 推定量がよく用いられるが,競合危険因子が存在する場合, Kaplan-Meier 推定量は妥当でないことが知られている.

このセミナーでは,生存時間解析の基礎事項を振り返った後,医療における医薬品やその他の治療法または予防法の有効性・安全性評価の場面を中心として,競合危険を考慮すべき状況,統計的モデルとその推測法が分かりやすく解説された.また,競合危険因子を考慮すべき状況の例が,実際の臨床試験を引用して具体的に紹介された.

大変多くの方が聴講され,225人を収容できる講義室も満員の盛況であった.医薬・医学における事象までの発生時間を扱うデータの解析において,競合危険を考慮すべき状況は多いと考えられるが,本セミナーで紹介されたような競合危険を考慮した解析はまだまだ少ないようである.本セミナーによって競合危険モデルの活用が促進されることを期待する.

③2008年の年次大会に関するお知らせ

松井茂之,松浦正明,森川敏彦(年会企画担当理事)

最初に,来年度以降の年次大会および日本計量生物シンポジウムの位置づけですが,既にニューズレター第94号でお知らせしましたように,統計関連学会連合大会はシンポジウムとして参加し,応用統計学会と共同開催の日本計量生物シンポジウムは年次大会と位置づけるとの方針が承認されております.改めてご確認ください.

来年度の年次大会は,2008年6月4日~6日(演題数によっては5日から),筑波大学の学生会館(つくばセンターから筑波大学循環バスで20分)で学生会館前

http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_south.html)にて開催されます.現在,以下の内容を企画しております.演題はいずれも仮題です.奮ってご参加下さい.

1. 特別セッションの開催

セッション名:「多重検定の新展開:False Discovery Rate とその周辺」

座長:柴田義貞(長崎大学)

(1)問題提起:柴田義貞

(2)理論的立場から:松田眞一(南山大学)

(3)応用の立場から1:ゲノム解析における FDR:牛島大(癌研究会)

(4)応用の立場から2:シグナル検出における FDR:松井茂之(京都大学)

(5)総合討論

2. チュートリアルセミナー(6月6日)

タイトル:「医薬品開発における統計学の活用:用量反応情報と臨床試験の計画及び解析~第1相から第3相まで」

講師:上坂浩之(日本イーライリリー)

時間:3時間(休憩含む)

3. 一般講演

以下のような分野毎の演題募集を考えております.会員の皆様の積極的なご発表をお願い致します.

A. 臨床試験・臨床研究, B. 臨床診断学, C. 疫学,

D.ゲノム・バイオインフォマティクス, E.資源・環境, F.その他

④日本計量生物学会 2007 年第4回対面理事会議事録

山岡和枝(庶務担当理事)

日時:2007年9月7日(金)17:00~19:00

会場:神戸大学第三学舎1階中会議室

出席:上坂,大瀧,大橋,佐藤,菅波,丹後,浜田,松井,松浦,松山,南,森川,山岡,吉村(監事)

欠席:折笠,岩崎,酒井

議題:

1. 日本計量生物学会シンポジウムに関する報告

2007年5月26日(土)に昭和女子大学学園本部館大会議室にて開催された標記シンポジウムについて,特別セッション4題,一般講演7題,特別講演があり,198名の参加者を受けて活発な議論が展開された.前日25日(金)に開催されたチュートリアルセミナー「疫学研究のデザインと曝露効果の推定」(講師,佐藤俊哉氏)の参加者は211名と大盛況であった.

2. 2008年度年次大会,および計量生物セミナー,等に関する報告

2008年度の年会案(つくば大学 学生会館前ホールで6月4日から5日予定(6日はチュートリアル,7日は応用統計学会)が森川理事より提案され,承認された.一般セッションは,年会として開催するため生物統計分野全般にわたるように配慮されていた.特別セッション,特別講演,チュートリアル等のテーマ案については各理事から提案することになった.

3. 編集委員会報告

雑誌編集状況について報告があり,日本計量生物学会25周年記念特別号,2006年計量生物セミナー記録集を本年度中に,本年5月に行われたシンポジウム報告での特別セッション「環境・医療・医薬におけるリスク評価と管理」での報告を,著者にオーガナイザーである椿氏の原稿も加え来年度に,いずれも発行予定との報告があった.なお,特別号に関しては特別会計から支出することが確認された.

4. 会報に関する報告

会報の発行は順調に進んでいることが報告された.

5. EAR-BC07について

EAR-BC07second announcement の配布,参加登録,演題申込みのWEBが9月1日より開始されたこと,開催経費概算案,法人会員登録状況,Invited speaker の依頼状況や演題登録のシステムの立ち上げも順調に進んでいることが報告された.なお演題・参加登録ではまだ登録者がおらず,理事の周辺で発表を呼びかけてほしいとの依頼があった.

6. 会員数

現在の会員数は、5月に比べて20名ほどの会員増があったことが報告された。

7. 統計関連学会連合理事会報告

2008年度連合関連学会大会が慶應義塾大学で開催予定であること、企画委員および事務局、WEB委員の交代がある旨が報告された。次期委員は、前回の理事会で決定していた統計関連学会連合大会企画委員会(2名)の岩崎理事、折笠理事に加え、統計関連学会連合大会事務局として伊藤陽一氏、服部聡氏に、統計関連学会連合WEB検討管理委員および大会Web委員として富田哲治氏が推薦され、承認された。

8. 日本統計学会 75周年記念出版事業

日本統計学会75周年記念出版事業(日本統計学会75周年記念出版・日本計量生物学会25周年記念出版)の経過について、原稿依頼が遅れ当該事業としては発行できなくなったこと、代替案として日本統計学会和文誌に特集として掲載する、あるいは独自に出版する用意があるとの提案がなされ(いずれも統計学会としては問題ないとの確認が得られている)、一般の人を対象として計量生物学の啓蒙を図ることに主眼をおき出版物として発行することが承認された。

9. 計量生物セミナー

12月のEAR-BC07時に開催予定の計量生物セミナーの進捗状況について報告があり、セミナーは日本語で行う、計量生物学に数ページの要約報告をする、参加費は会員と非会員に差をつける、時間は11日13:30-17:30の4時間などが決定された。加えて今後の計量生物セミナー開催についての企画委員の見解について報告があり、問題に応じて臨機応変に開催形態を考えつつ開催する。担当理事は決めておいた方が運営がやりやすいということから引き続き上坂理事担当で進めること、できるだけ手上げ方式で進めていくことが確認された。

10. 人事

会長預かりとなっていた佐藤理事の日本計量生物学会賞担当からの辞意表明について、丹後会長より理事会の承認事項としたいとの申し出があり、辞退理由の説明を受けたのち、承認された。引き継ぎ事項の報告があった。委員に監査を含めないことのほか、特に学会賞と功労賞の基準が曖昧なこと、会則での不備な点などの改善が必要との提案があり、前者の基準については次期担当が、また会則については組織担当理事に検討を依頼することになった。なお、佐藤学会賞担当にかわり、岩崎理事に依頼していることが丹後会長より報告され、2008年度担当は岩崎理事とすることが承認された。

11. 計量生物学会倫理綱領

計量生物学会倫理綱領についてはワーキンググループで現在検討中であり、次回の対面あるいはe-mail理事会にできるだけ早急に諮るようにする予定であるとの報告があった。

12. 次回の対面理事会について

EAR-BC07時に開催するほうがよいとの共通理解のもとで、11日18:00から東京大学にて開催する予定とすることになった。会場は大橋理事が手配することになった。

⑤学会誌「計量生物学」への投稿のお願い

松山 裕(編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著(Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説(Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報(Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム(Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声(Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。また、2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES」に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。なお、投稿に際しては、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照してください。

⑥ XXIVth International Biometric Conference(第24回国際計量生物学会)開催のお知らせ

2008年7月13日-18日にイギリス、ダブリンにて24th IBSが開催されます。詳細は、

<http://www.cpreregistrations.com/ibc/2008/> をご覧下さい。

日本計量生物学会会員のみならず、ふるってご参加下さい。

⑦2008年度統計関連学会連合大会のお知らせ

岩崎 学・折笠秀樹(連合大会企画担当)

2008年度の統計関連学会連合大会(本学会を含め統計関連5学会共催)は、以下の要領で開催予定です。

日 時:2008年9月7日(日)~9月10日(水)(予定)

会 場:慶應義塾大学理工学部(矢上キャンパス:神奈川県横浜市港北区日吉3-14-1)

交 通:東急東横線日吉駅から徒歩15分

これまでの連合大会同様、企画セッション、コンペティション、チュートリアルセミナー、市民講演会など盛り沢山の企画が予定されています。企画セッションの公募などにつきましては、今後随時会報などにてご案内いたします。また、連合大会のホームページも12月中には開設予定ですので、そちらも併せてご覧ください。

第1回プログラム委員会が平成19年11月17日に開催されました。連合大会での出し物などは2007年度大会とほぼ同じです。初日の午後に市民講演会及びチュートリアルセミナーを開催する計画です。なお、市民講演会のみ先行して企画が進んでいますが、それ以外はこれからです。折笠理事がチュートリアルセミナー担当、岩崎理事がプログラム担当となりました。連合大会で計量生物学会として企画すべき出し物(奨励賞講演、チュートリアルのテーマ等)がございましたら、折笠(horigasa@las.u-toyama.ac.jp)もしくは岩崎(iwasaki@st.seikei.ac.jp)までお願いします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

⑧2008年度日本臨床薬理学会海外研修員募集要項

日本臨床薬理学会海外研修員選考委員会
次の要項により2008年度本学会海外研修員候補者を募集します。

I. 日本臨床薬理学会海外研修員

A. 目的

国際的な視点より、わが国の薬物治療に関わる質の高い臨床研究、疫学研究を遂行し、またそのシステム作りや教育に貢献できる人材の育成を図ることを目的とする。

B. 応募資格

1. 薬物治療の臨床研究に従事、またはそれを志す医師および医師以外の研究者(原則として40歳以下)
2. 研修に必要な知識、経験および語学力を有するもの
3. 薬物治療の臨床研究が可能な研修施設あるいは研修コースにおいて2008年9月より1年間以上2年間以内の研修が可能なもの
4. 日本臨床薬理学会会員であること(応募時入会可)
5. 帰国後、臨床薬理学領域の活動を継続し、医師は学会認定医、薬剤師は学会認定薬剤師の資格を取得する意思のあるもの
他の機関に助成申請をされている場合は願書にその旨記載ください(選考の際には他の機関への助成申請の有無は考慮しません)。また他の機関からの助成が決定した場合は速やかにその旨をご連絡ください。その結果、D. 奨学金支給額の一部項目が支給されない、あるいは減額されることがあります。

C. 募集人員

1. 臨床研究を志向する医師 若干名
2. 臨床薬学、生物統計学、薬剤疫学等、臨床研究に資する学問を志向する研究者 若干名

D. 奨学金支給額及び支給期間

1. 旅費：日本より目的地までの本人分直行往復運賃額および付帯費用
2. 滞在費：米ドルとして1ヵ月当たり本入分1,350ドル、同伴配偶者250ドル、子供1人当たり100ドル
(2名まで)*滞在費の金額に関しては検討中であり変更される可能性があります。
3. 医療保険費補助：1ヵ月当たり100ドルまで
4. 学会参加費補助：年1回1,000ドル以内。

ただし日本国外の学会で海外研修制度委員会が認めたものにかぎる。

5. 語学研修費(希望者):3ヶ月以内で、1ヶ月当たり1,500ドル以内の実費
6. 支給期間:研修開始から定められた期間とする。
ただし期間延長の場合は帰国航空運賃・付帯費用のみ支給する。

E. 応募手続き

1. 希望者は下記の海外研修事務局に願書を請求してください(電話による申し込みは受け付けません)
願書は学会ホームページ(<http://www.jscpt.jp>)からもダウンロードできます。
2. 応募必要書類
 - a. 願書(3.5×4cmの写真添付)
 - b. 推薦状2通(所属機関責任者および本学会評議員)
所属機関責任者は、大学の場合、総合大学では、学部は学部長、大学院は研究科長とし、単科大学では学長とし、研究所では研究所長とする。また研究機関の場合は代表責任者とする。
なお、所属機関責任者の推薦状の中に応募者が帰国後、臨床薬理学領域の活動に携わることを明記すること。
 - c. 研修先からの臨床薬理プログラムに参加させる旨の手紙および研修先における薬物治療の臨床研究に関するパブリケーションリスト
 - d. 健康診断書
 - e. 主要論文2編(各8部)
 - f. 西暦で記載する
3. 締切:2008年2月末日

F. 選考方法

1. 一次：書類審査
2. 二次：面接(必須、日時・場所は一次審査の結果通知の際にお知らせします)
面接日は6月下旬または7月上旬の週末を予定
3. 結果:二次面接終了後2週間以内に通知

II. 連絡先

日本臨床薬理学会海外研修事務局
〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
FAX:03-3815-1762 E-mail:clinphar@jade.dti.ne.jp
URL <http://www.jscpt.jp>

⑨2008年度日本臨床薬理学会 CRC 海外研修員募集について

日本臨床薬理学会海外研修員選考委員会

日本臨床薬理学会では2004年度から2007年度までに日本臨床薬理学会認定CRCをメリーランド大学へ9名、オランダのTransfer Group Rotterdamへ3名の海外研修を実施いたしました。

2008年からは海外研修制度規則に従い公募を行うこととなりましたのでお知らせいたします。

なお、募集要項は下記のとおりです。詳細は学会ホームページをご覧ください。

I. 日本臨床薬理学会 CRC 海外研修員

A. 目的

国際的な視点より、わが国の臨床研究の推進と質の高いCRCの養成を目的とする。またそのシステム作りや教育に貢献できる人材の育成を図ることを目的とする。

B. 応募資格

1. 学会認定CRCでCRC業務に従事し、海外での研修を

希望する本学会会員(応募時入会可)で原則 40 歳以下

2. 研修に必要な知識, 経験および語学力を有するもの.
3. 選考委員会が適当と認める臨床研究機関または施設で研修期間は 2008 年 7 月より 1 ヶ月以内.
4. 帰国後, 臨床研究の活動を継続するもの.
5. 他の機関からの助成金の重複は認めない.
6. 研修員が上記に定められた義務を履行しない時には本学会の奨学金を返還しなければならない. ただし, やむをえない事情の場合はこの限りでない.

C. 募集人員

1. 認定 CRC 若干名

D. 奨学金支給額

1. 旅費: 日本より目的地までの本人分直行往復運賃額および付帯費用
2. 渡航前準備費および滞在費等: 10 万円
3. 研修に係わる費用: 研修先の CRC 研修費等

E. 応募手続き

1. 希望者は下記の海外研修事務局に願書を請求してください(電話による申し込みは受け付けません)
願書は学会ホームページ(<http://www.jscpt.jp>)からもダウンロードできます.
2. 応募必要書類
 - a. 願書(3.5×4cm の写真添付)
 - b. 推薦状 2 通(所属機関責任者および施設の上司)
所属機関責任者は大学の場合, 総合大学では, 学部は学部長, 大学院は研究科長として, 単科大学では学長とし, 研究所では研究所長とする. また研究機関の場合は代表責任者とする. 企業の場合は取締役社長とする.
なお, 所属機関責任者の推薦状の中に応募者が帰国後, 臨床薬理学領域の活動に携わることを明記すること.
 - c. 健康診断書
 - d. 業績: 学会発表, 研究会発表, 著書等
 - e. 西暦で記載する
3. 締切: 2008 年 2 月末日

F. 選考方法

1. 一次: 書類審査
2. 二次: 面接(必須, 日時・場所は一次審査の結果通知の際にお知らせします)
3. 結果: 二次面接終了後 2 週間以内に通知

II. 連絡先

日本臨床薬理学会海外研修事務局
〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル
FAX: 03-3815-1762 E-mail: clinphar@jade.dti.ne.jp
URL <http://www.jscpt.jp>

⑩編集後記

今年も残り少なくなって参りました. 毎年のことながらこの時期になると月日の経つ速さに驚かされます. ほんの些細なことでもいいのですが, 自分なりに今年には世の中に何が貢献できたのだろうかと思うと忸怩たる想いに囚われてしまいます. 反省はするのですが次のアクションに繋がらないのが何とも情けない限りです.

さて, ご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが, 9 月 26 日から 11 月 18 日まで両国の江戸東京博物館で, 「文豪・夏目漱石-そのころとまなざし-」展が開催されました. 漱石の朝日新聞入社 100 年, 東北大学創立 100 年, 江戸東京博物館創立 15 周年ということにかこつけての開催でしたが, 漱石がロンドン留学中に「忌々しき Pearson」と書いたメモなど

も陳列されておりました. (実は, じっくり見ていたつもりだったのですが, うっかり見逃していたようで, 椿先生から, 例のメモも出品されてたでしょ, とご指摘を受けて地団駄踏んで悔やんだ次第です.) 東北大学図書館には漱石文庫があり, 漱石の蔵書, メモ, 遺品などが保存されています. 木曜会と称して, 漱石山房に集った多くの若者の一人であった小宮豊隆が東北大学教授, 図書館長であった縁で, 第二次大戦の戦火を逃れるために早稲田の夏目邸から仙台の地に疎開させ, その後, 夏目家から寄贈されたものです. ちなみに小宮は漱石を父と慕い, 「三四郎」のモデルであるとも言われており, 東北大学教授の職を退いた後は東京音楽学校(現・東京藝術大学)校長の職などを歴任しています.

漱石のメモに出てくる Karl Pearson といえば, 今年は彼の生誕 150 周年記念の年でありました. 1911 年に世界で初めて University College London に Statistics Department を創設した功績は今更記すまでもないことですが, 日本では, 記念行事もないまま今年も終わろうとしています.

Pearson だけでなく, Student と William Sealy Gossett も昨年が生誕 130 周年, 今年は没後 70 年という区切りの年でした. いずれも国内の統計関連の各種学会では話題になることもなかったようです. 何か記念行事をといっても, Gossett が勤務していた Guinness ビールを飲んでドンちゃん騒ぎをするなんてことを期待している訳ではないのですが, 何となく寂しい気がします.

次号は梅の花の綻ぶ時季に発行予定です.

日本橋の河岸より

<p>計量生物学会ニューズレター95号 2007年11月30日発行 発行者 日本計量生物学会 発行責任者 丹後 俊郎 編集者 松井茂之, 酒井弘憲</p>
